



神奈川県

平成 23 年度

不登校経験者の定時制高校進学後の動向及び 要因分析に関する一考察

— 学校・家庭生活調査から見えてくる現状と課題 —

平成 24 年 4 月

神奈川県立総合教育センター

神奈川県立高等学校定時制通信制教頭会

鳴門教育大学教職大学院

はじめに

急速な社会情勢の変化に伴い、子どもたちの価値観や興味関心の多様化が進み、生活全般を取り巻く様々な情報が輻輳するなか、不登校生徒は年々増加する傾向にあり、教育現場での早急な対応が求められています。本県においても、不登校児童・生徒数はここ 10 年で約 2 倍となり、全国的にも高い数値を示しており、これは極めて憂慮すべき状況であります。

そこで、神奈川県立総合教育センターでは、一昨年度・昨年度に引き続き、県立高等学校定時制通信制教頭会教育指導委員会と連携を図るとともに、今年度より鳴門教育大学教職大学院との共同研究として、「定時制高校に通う高校生の学校・家庭生活に関するアンケート」を実施しました。

本報告が、県内外高等学校での教育、さらには各県教育委員会の不登校対策への取組みの一助となれば幸いです。

平成 24 年 4 月

神奈川県立総合教育センター
所長 下山田 伸一郎

研究の目的

「定時制高校に通う高校生の学校・家庭生活に関するアンケート」の集計データをもとに、小・中学校時代に不登校を経験した生徒の実態を把握することにより、定時制高校における、生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育を進める効果的な取組みについて分析・検証し、不登校生徒への今後の対応策を探る一助とする。

研究の方法と内容

1 方法

質問紙法によるアンケート調査

2 対象

県立高校定時制生徒 2,879名

3 調査期間

平成23年6月から7月

4 内容

I 不登校未経験者と不登校経験者を比較した調査結果（県立高等学校定時制通信制教頭会報告）

(1) 不登校未経験者と不登校経験者について

(2) 性別について

(3) 就寝時間と起床時間について

(4) 朝食の有無について

(5) 小・中学校時代からの親しい友だちの存在について

(6) 1日の携帯電話の使用時間について

(7) 定時制高校を選んだ理由について

(8) 学校を休みたいと思うかについて

(9) 中学生時代の満足度

II 不登校経験者を対象とした調査結果

(1) 学校を休んでいる間の他の通学について

(2) 学校を休んでいる間の学習方法について

(3) 不登校だった頃を振り返った際の気持ちについて

(4) 小・中学校時代に学校を休みがちだった状況から抜け出し、現在、定時制高校に登校できている理由について

(5) 授業内容はどのくらい充実・満足しているかについて

(6) 先生との関係にどのくらい充実・満足しているかについて

(7) 魅力ある授業とは何かについて

III 不登校（長期欠席）の原因についての考察

IV まとめと今後の課題

結果と考察

なお、今回の調査結果については、鳴門教育大学教職大学院へ有意差検定を依頼し、有意差が認められた項目について述べることとする。

I 不登校未経験者と不登校経験者を比較した調査結果について

はじめに、今回のアンケート調査結果を不登校未経験者と不登校経験者とに分け、それぞれの項目について比較を行った。

(1) 不登校未経験者と不登校経験者について

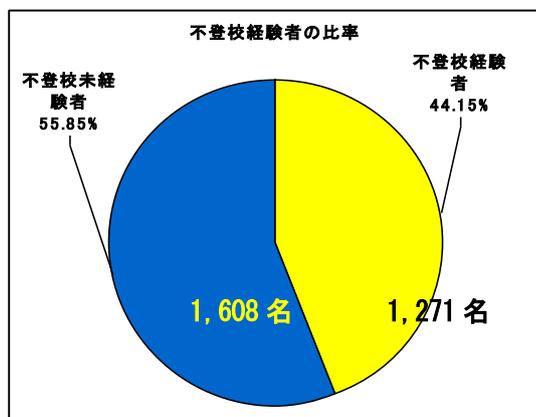


図1 不登校経験者の割合

図1は、全生徒（アンケート回答者）に対する不登校経験者の割合を示したものである。

この結果をみると、不登校経験者は全体の44.15%にもものぼっており、改めて定時制在籍者における不登校経験者の多さを確認することができる。

※「不登校経験者」とは、アンケートの中で小・中学校時代に一年間に30日以上休んだ（学校に行かなかった、行けなかった）経験があると答えた生徒。

(2) 性別について

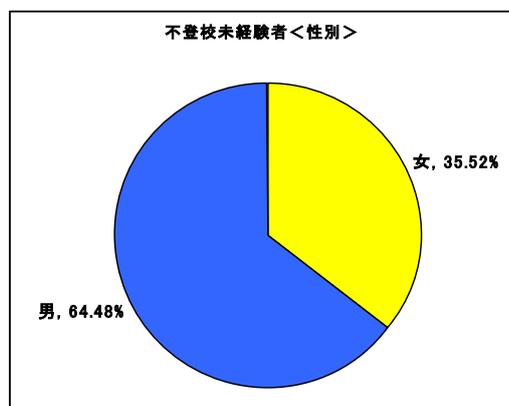


図2-1 不登校未経験者の男女比率(1520名)

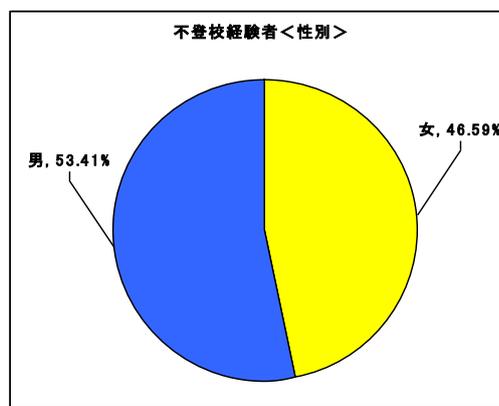


図2-2 不登校経験者の男女比率(1247名)

図 2-1 及び図 2-2 は、定時制高校に通学している不登校未経験者と不登校経験者の男女の割合について示したものである。

この結果をみると、不登校未経験者においては男子の割合 64.48%、女子の割合は 35.52%であるのに対し、不登校経験者においては男子の割合が 53.41%、女子の割合が 46.59%であり、不登校未経験者に比べ不登校経験者の女子の割合が 11.07%高い。

(3) 就寝時間と起床時間について

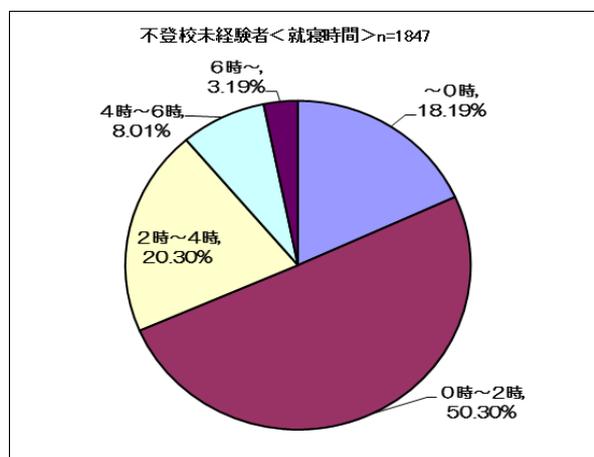


図 3-1 不登校未経験者の就寝時間

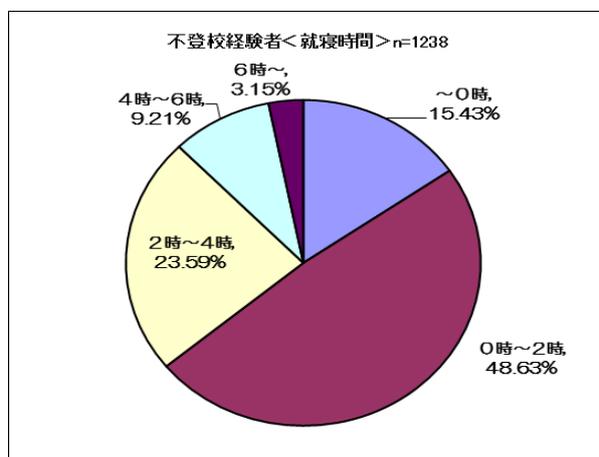


図 3-2 不登校経験者の就寝時間

図 3-1 及び図 3-2 は、就寝時間について不登校未経験者と不登校経験者を比較したものである。

これを見ると、不登校経験者は就寝時間が「午前 2 時～4 時前」の割合が相対的に多くなっているのに対し、不登校未経験者は「午前 0 時より前」と回答している割合が相対的に多くなっていた。

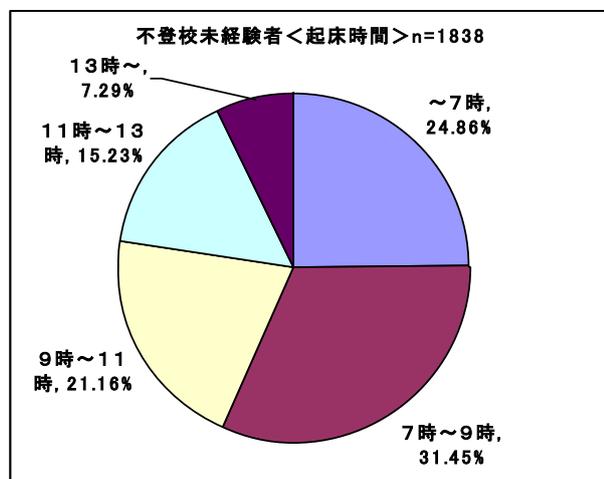


図 3-3 不登校未経験者の起床時間

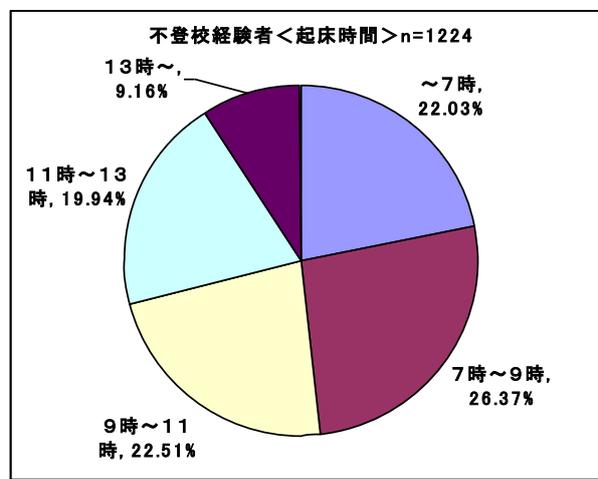


図 3-4 不登校経験者の起床時間

次に図 3-3 及び図 3-4 の起床時間について見ると、不登校経験者は「午前 11 時～午後 1 時前」と「午後 1 時より後」と回答した割合が相対的に多かったのに対し、不登校未経験者は「午前 7 時より前」と「午前 7 時から 9 時前」と回答した割合が相対的に多かった。

これらのことから、不登校未経験者に比べ不登校経験者は、就寝時間と起床時間がともに遅いことが分かる。したがって、単に定時制高校に通学していることだけではなく、不登校経験者は夜遅く寝て昼ごろ起きる夜型の生活リズムになっている割合が多いことが分かる。

(4) 朝食の有無について

図 4-1 及び図 4-2 は、朝食の有無についての調査結果である。

これをみると、不登校経験者の方が不登校未経験者に比べ、「毎日食べる」と答えた割合が少ないことがわかる。

(3)で記した、起床時間と就寝時間の結果を合わせてみると、不登校経験者においては、夜型の生活をしているものが多く、起床時間が遅いことから食事が朝昼兼用となっていたり、朝食を食べなかったりするものが多くなっていることが分かる。

この結果から一概に言い切ることはできないが、朝食に限らずしっかりとした食生活の習慣や規則正しい生活リズムを身につけることは、心身の健全育成に必要不可欠であると推察できる。

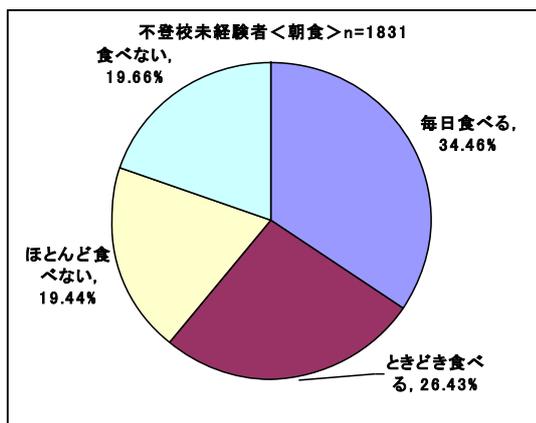


図4-1 不登校未経験者の朝食状況調査

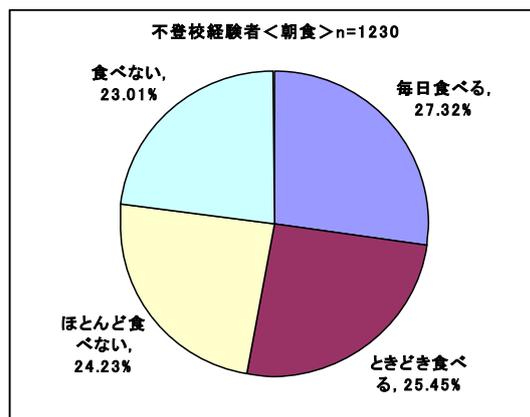


図4-2 不登校経験者の朝食状況調査

(5) 小・中学校時代からの親しい友だちの存在について

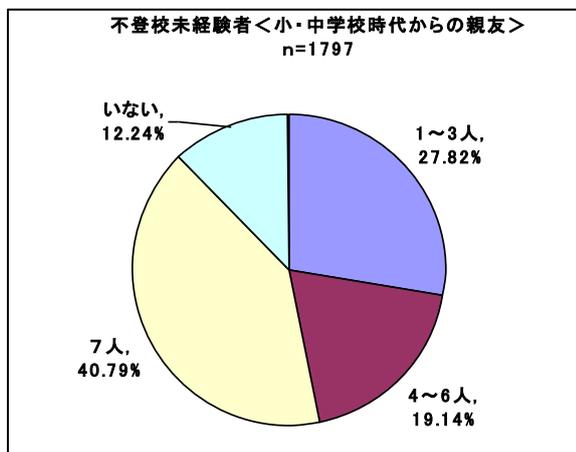


図 5-1 不登校未経験者の小・中学校時代からの親しい友だちの人数調査

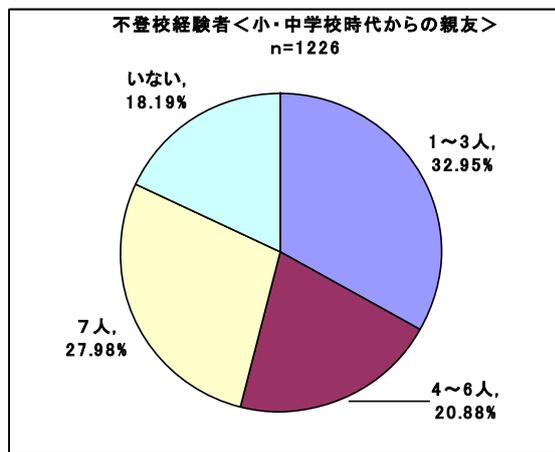


図 5-2 不登校経験者の小・中学校時代からの親しい友だちの人数調査

図 5-1 及び図 5-2 は、不登校未経験者と不登校経験者の小・中学校時代からの親しい友だちについての回答結果である。

これをみると、不登校未経験者では「小・中学校時代からの親しい友だちが多い」と回答している割合が相対的に多く、不登校経験者では、「いない」及び「1~3人」と回答している割合が相対的に多くなっていることが分かる。

この結果から、不登校経験者は人とのコミュニケーションが苦手で、親しい友だちも限られた人数になっていることが推察できる。

(6) 1日の携帯電話の平均使用時間

図6-1及び図6-2は、1日の携帯電話の平均使用時間についての回答結果である。

この結果を見ると、不登校経験者では「4時間以上」と回答した生徒が相対的に多く、不登校未経験者においては「1時間～2時間未満」と回答した生徒が相対的に多かった。

(5)小・中学校時代からの親しい友だちの人数の結果と合わせて考えると、不登校経験者は小・中学校時代からの親しい友だちは少ないが、携帯電話等を使う時間は相対的に多くなっており、友だちとのコミュニケーションも電子機器などを活用して行っていることが推察できる。

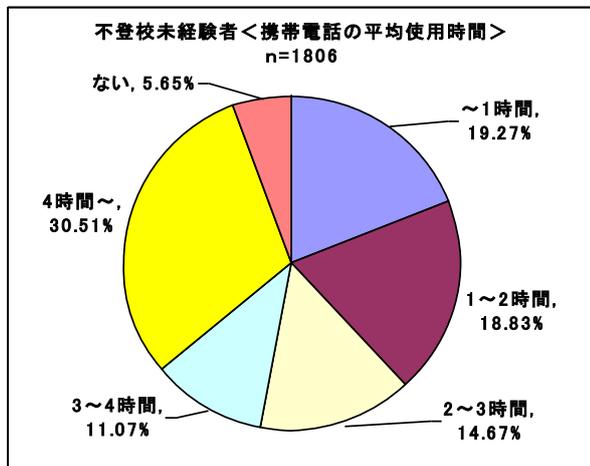


図6-1 不登校未経験者の1日の携帯電話の平均使用時間

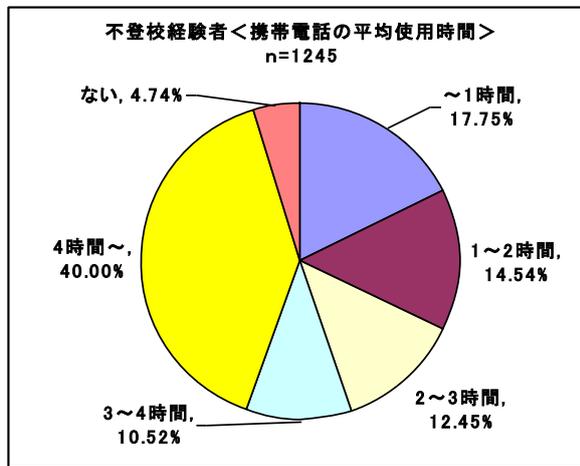


図6-2 不登校経験者の1日の携帯電話の平均使用時間

(7) 定時制高校を選んだ理由について

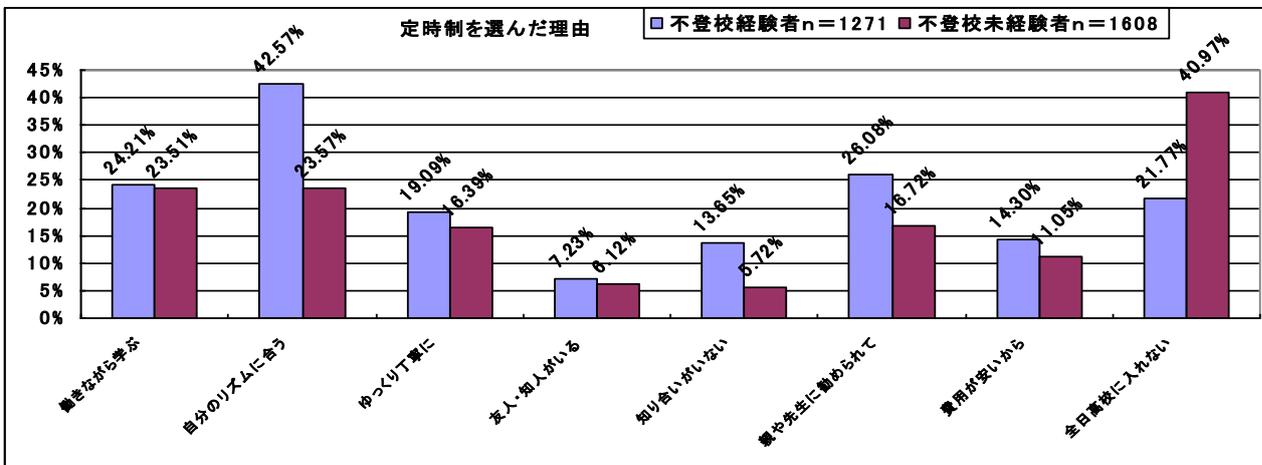


図7-1 定時制高校を選んだ理由(1～3つの複数回答)

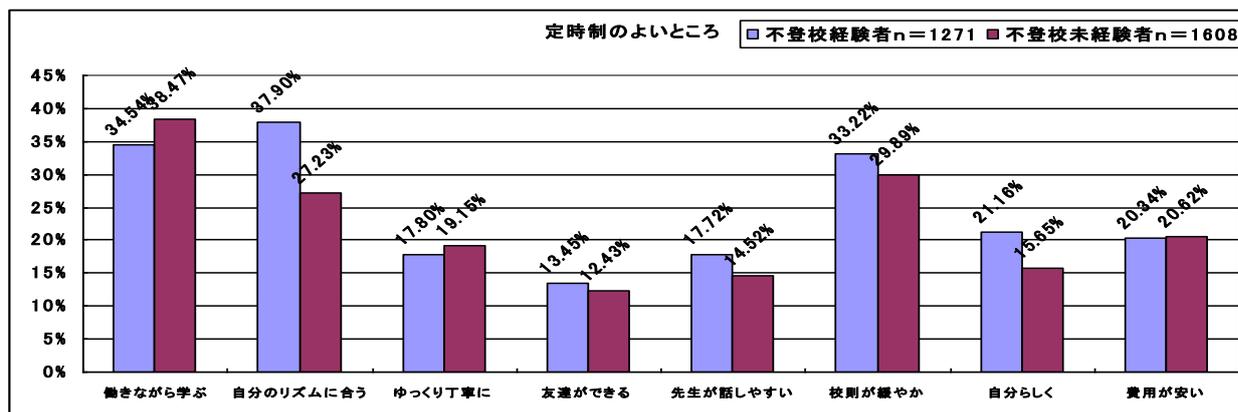


図7-2 定時制高校のよいところ(1～3つの複数回答)

図 7-1 は、不登校未経験者と不登校経験者の定時制を選んだ理由について、図 7-2 は定時制高校のよいところについての調査結果である。

不登校未経験者は、「受検に失敗し希望していた全日制高校に入学できなかった」と回答した割合が相対的に多かったのに対し、不登校経験者は、「授業時間などが自分の生活リズムに合っている」と回答した割合が相対的に多かった。

この結果から、不登校未経験者は全日制の高校への進学を第 1 希望として受検をしたが、残念ながら合格できず不本意な状況で定時制高校に入学しているのに対し、不登校経験者は自分の生活リズム（就寝時間と起床時間の結果参照）に合った課程を選択しており、そのリズムをあまり変えることなく通学できる定時制高校へ入学していることが推察できる。

(8) 学校を休みたいと思うことについて

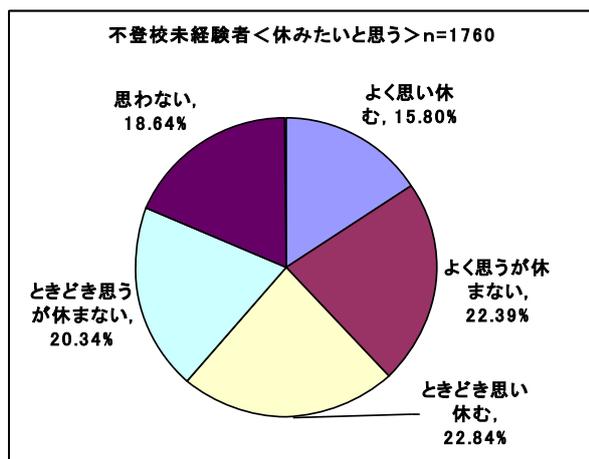


図 8-1 不登校未経験者

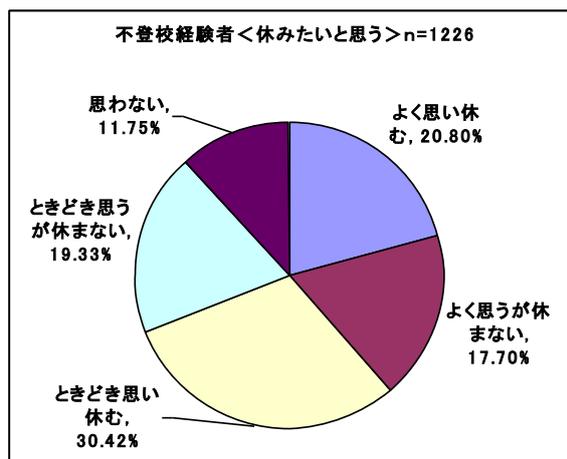


図 8-2 不登校経験者

図 8-1 及び 8-2 は、「学校を休みたいと思うことがありますか。」という質問に対する回答結果である。

当たり前の結果ではあるが、「よく思い休む」「ときどき思い休む」と答えた割合は、不登校経験者の方が相対的に多くなっており、「思わない」と答えた割合は不登校未経験者の方が多かった。

この結果から、不登校経験者は高校入学後においても「学校を休みたい」と思う割合が多く、実際に半数の生徒が休んでいることが分かる。

(9) 中学生時代の満足度について

図 9-1 及び 9-2 は、中学生時代の友だち関係について、図 9-3 及び 9-4 は、中学生時代の授業内容について、図 9-5 及び 9-6 は、中学生時代の先生との関係について、図 9-7 及び 9-8 は、中学生時代の行事や部活動についてその満足度等について調査した結果である。

まず友人関係についてみると、「とても満足」「ほぼ満足」と答えた割合の合計では、不登校未経験者が 77.77%であったのに対し、不登校経験者は 58.95%でおよそ 19 ポイントも低い結果であった。

次に授業内容についてみると、「どの授業もよく分かる」「分かる授業が多い」と答えた割合の合計では、不登校未経験者が 37.43%であったのに対し、不登校経験者は 27.07%で 10 ポイント以上低い結果であった。

さらに先生との関係についてみると、「とても満足」「ほぼ満足」と答えた割合の合計では、不登校未経験者が 66.05%であったのに対し、不登校経験者は 50.67%でおよそ 15 ポイントも低い結果であった。

行事や部活動についても顕著で、「とても満足」「ほぼ満足」と答えた割合の合計では、不登校未経験者が 64.54%であったのに対し、不登校経験者は 39.55%で大きな開きが見られた。

これらの結果から、不登校経験者は中学生時代の友人関係や先生との関係において不登校未経験者に

比べ満足している割合が低く、授業内容についても分からない授業が多かったことや行事や部活動についても満足していなかったことが理解できた。休むようになった理由（図9-9）に「友だちとの関係」や「授業がわからない」を挙げている生徒が多いことから、この結果はある程度想定できるものである。

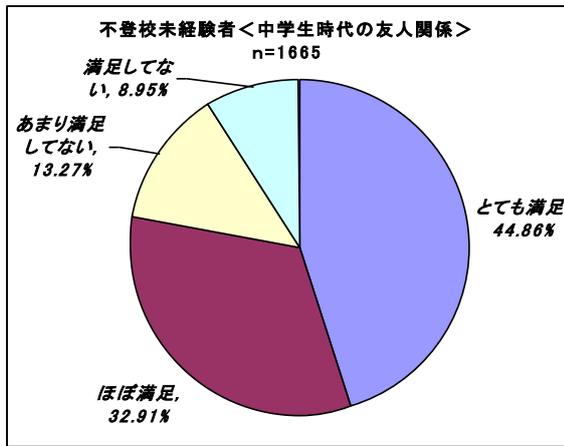


図 9-1 友だち関係(不登校未経験者)

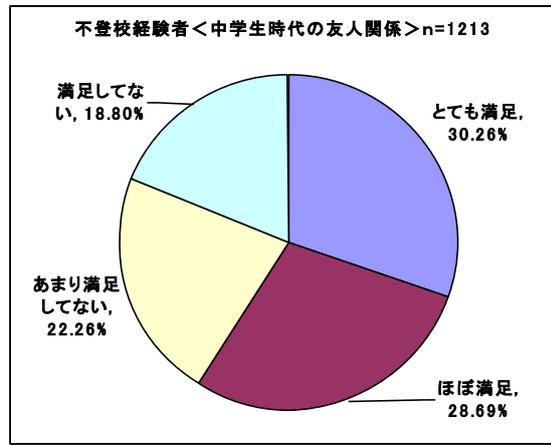


図 9-2 友だち関係(不登校経験者)

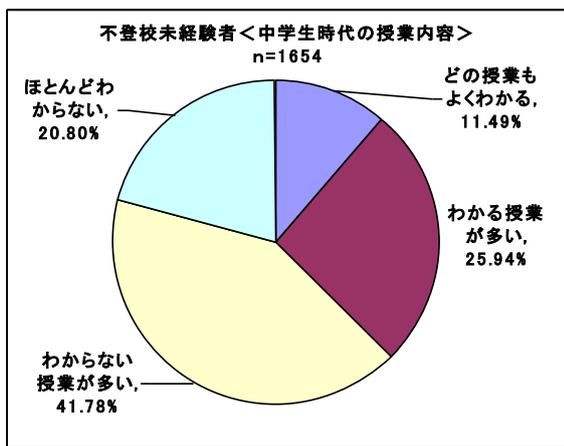


図 9-3 授業内容(不登校未経験者)

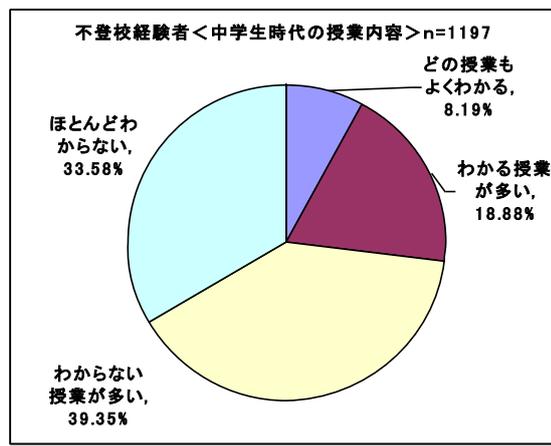


図 9-4 授業内容(不登校経験者)

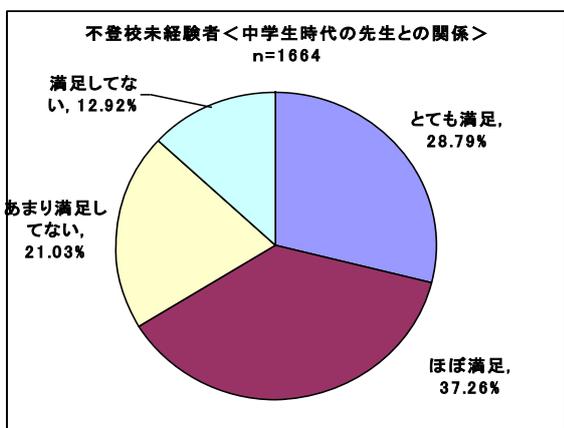


図 9-5 先生との関係(不登校未経験者)

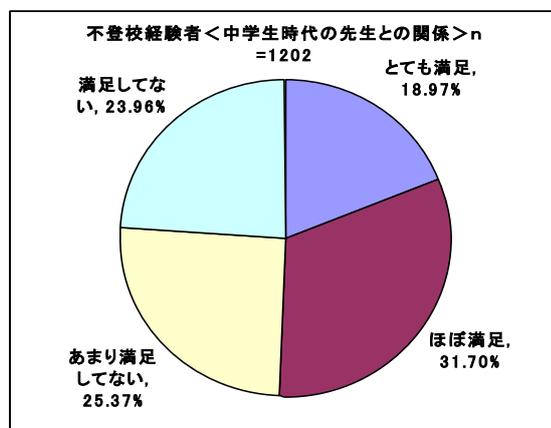


図 9-6 先生との関係(不登校経験者)

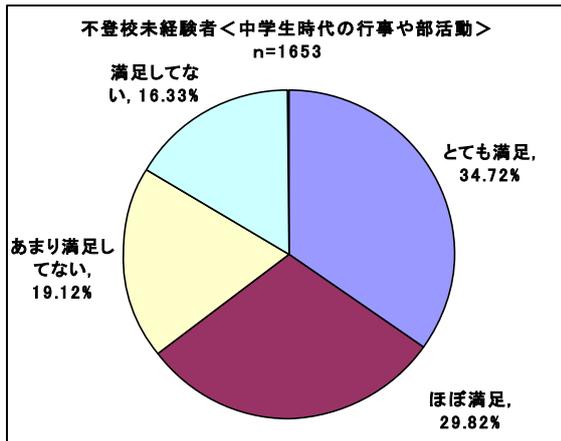


図 9-7 行事や部活動(不登校未経験者)

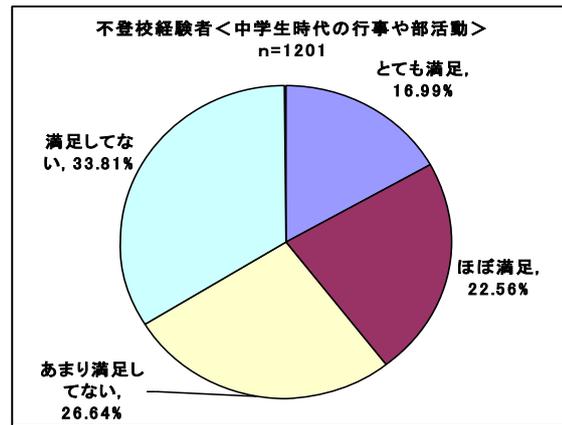


図 9-8 行事や部活動(不登校経験者)

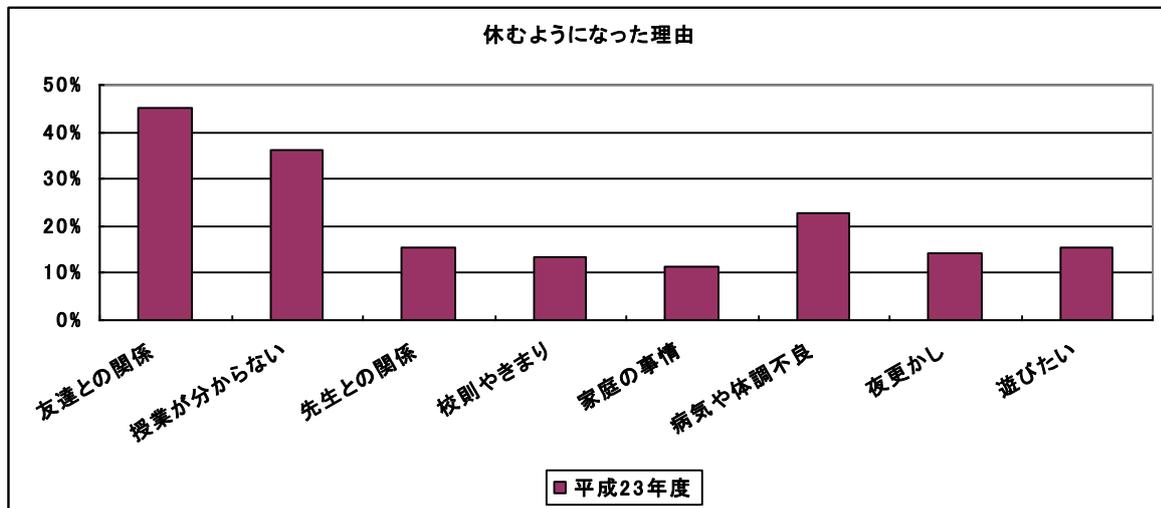


図 9-9 休むようになった理由(不登校経験者対象 複数回答)

Ⅱ 不登校経験者を対象とした調査結果(平成23年度と22年度との比較)

次に、今回の調査において中学校や小学校時代に不登校経験者と回答した生徒のみを対象としてその傾向をまとめ、また、昨年度の調査結果と比較した。

(1) 学校を休んでいる間の、他の通学について

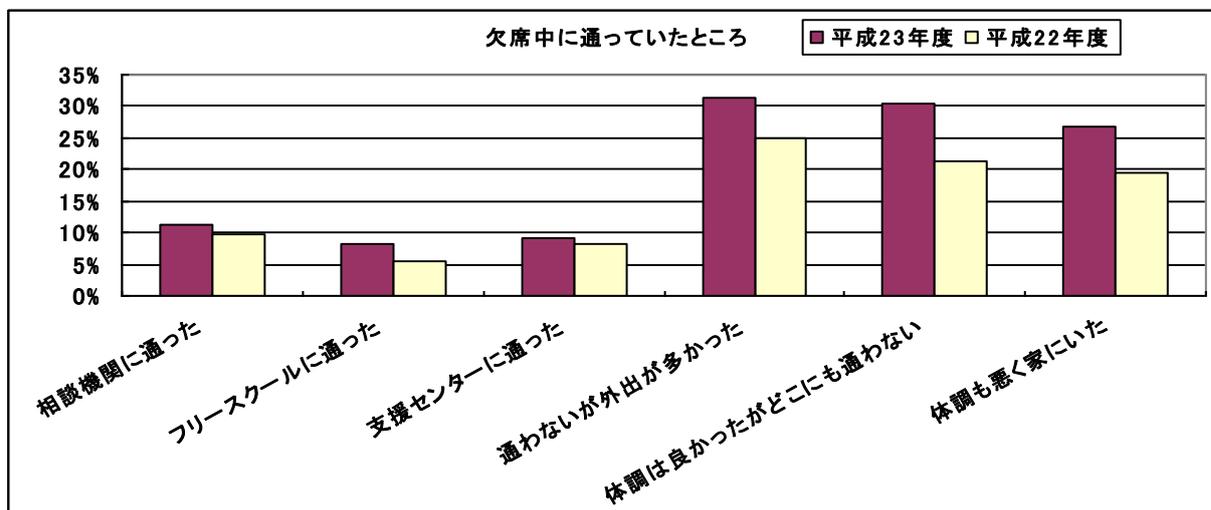


図10 不登校経験者の欠席中の活動調査結果(1~3つの複数回答)

図10は、不登校経験者が学校を休んでいる間で活動の状況に関する調査結果である。

22年度、23年度に共通することは、「どこにも通わなかったが、外出が多かった」、「体調は良かったが、どこにも通わない」、「体調も悪く家にいた」の順で割合が高く、「相談機関へ通った」、「支援センターに通った」という割合が低かった。しかし、相談機関やフリースクール、教育支援センターへ通っていた生徒は、いずれも昨年度より割合が高くなっており、支援の場に支えられていた生徒の割合が増えているという、好ましい状況がうかがえる。

(2) 不登校だった頃を振り返った際の気持ちについて

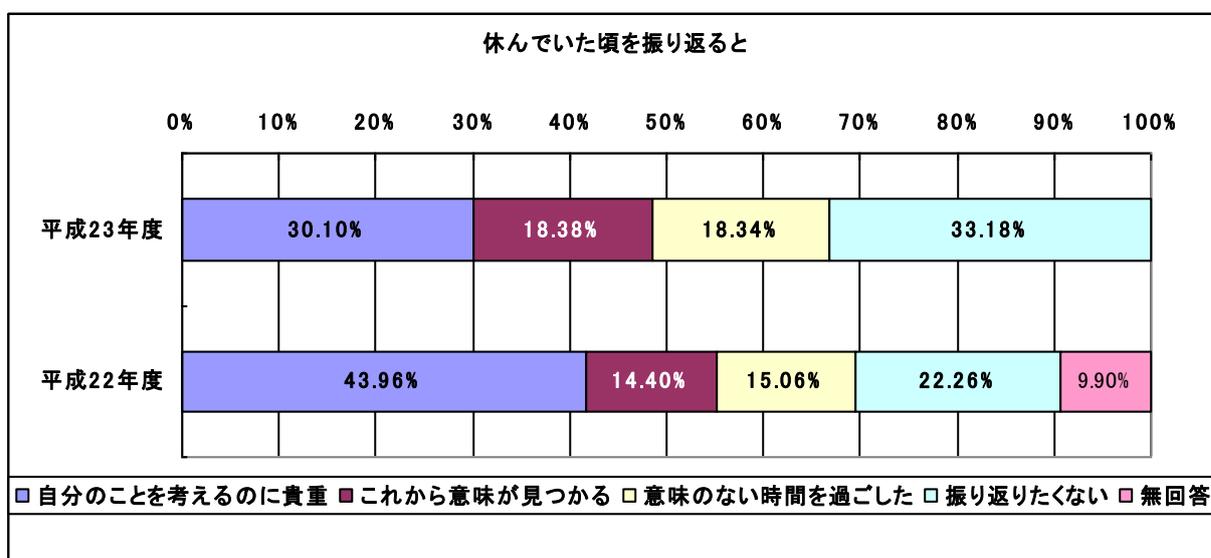


図11 不登校経験者の欠席時代を振り返った時の気持ちについての調査結果

図 11 は不登校経験者の欠席していた頃を振り返った時の気持ちに関する調査結果である。

平成 23 度は、22 年度に比べ、「自分のことを考えるのに貴重だった」や「これから意味が見つかる」と肯定的に回答する割合が減少した。「意味のない時間を過ごした」、「振り返りたくない」回答の割合が増え、不登校だった頃を「マイナス」に考える傾向があると同時に、今の生活がより良いものになっているために（参考；図 12）、過去をマイナスに見たことが考えられる。

(3) 小・中学校時代に学校を休みがちだった状況から抜け出し、現在、定時制高校に登校できている理由について

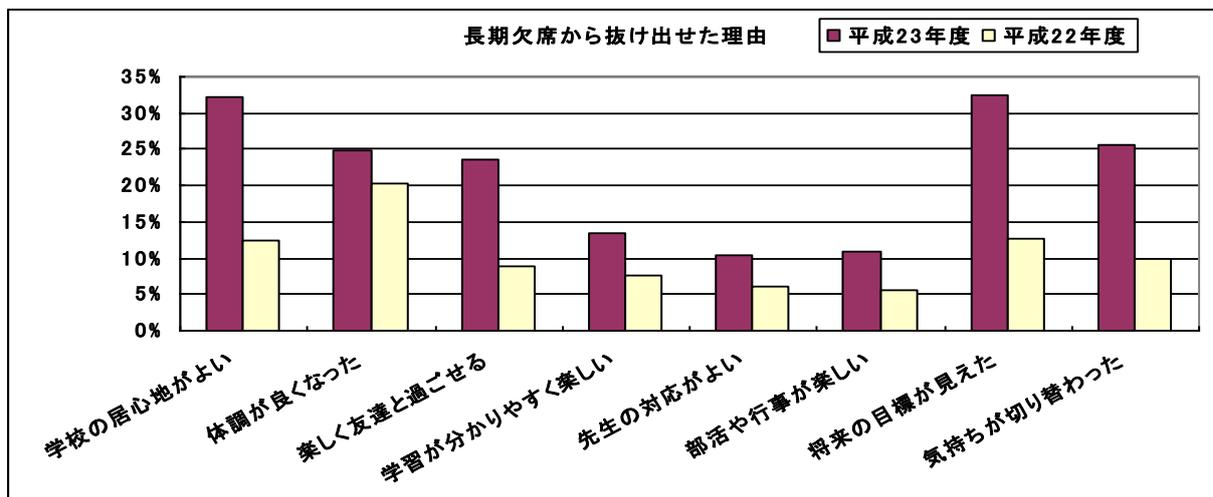


図 12 長期欠席から抜け出せた理由についての調査結果

図 12 は不登校経験者が長期欠席から抜け出せた理由についての調査結果である。

平成 23 年度は、「将来の目標が見えた」、「学校の居心地がよい」、「気持ちが切り替わった」という割合が高く、「楽しく友だちと過ごせる」も含め、昨年度の調査結果よりも割合が増加し、好結果となった。

これは、入学を機に自分の居場所が出来、「良好な人間関係」を育むことができるので、今までの学校に対する気持ちも変わり、体調よく高校生活を送れていると考えられる。

(4) 授業内容はどのくらい充実・満足しているかどうかについて

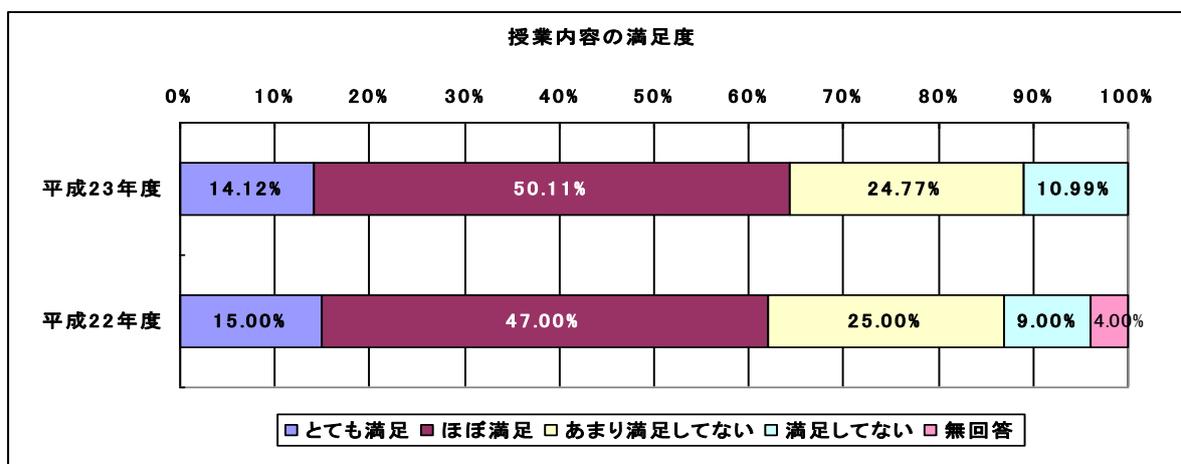


図 13 授業内容の満足度についての調査結果

図 13 は不登校経験者の授業内容の満足度についての調査結果である。

全体的に観察すると、平成 23 年度は 22 年度に比べ「ほぼ満足」の回答の割合が高くなり、「とても満足」と「ほぼ満足」の合計では、割合が増えて 65%に近づいた。

一方、「授業に満足していない」生徒が約 35%おり、原因として生徒の授業に対する「興味・関心を高める期待」や「学び直しへの期待」に添えていないことなどが考えられる。学校で組織的な授業研究を深めることにより、定時制高校に入学した生徒の授業へ満足度を高めることができるのではないかな。

(5) 先生との関係にどのくらい充実・満足しているか

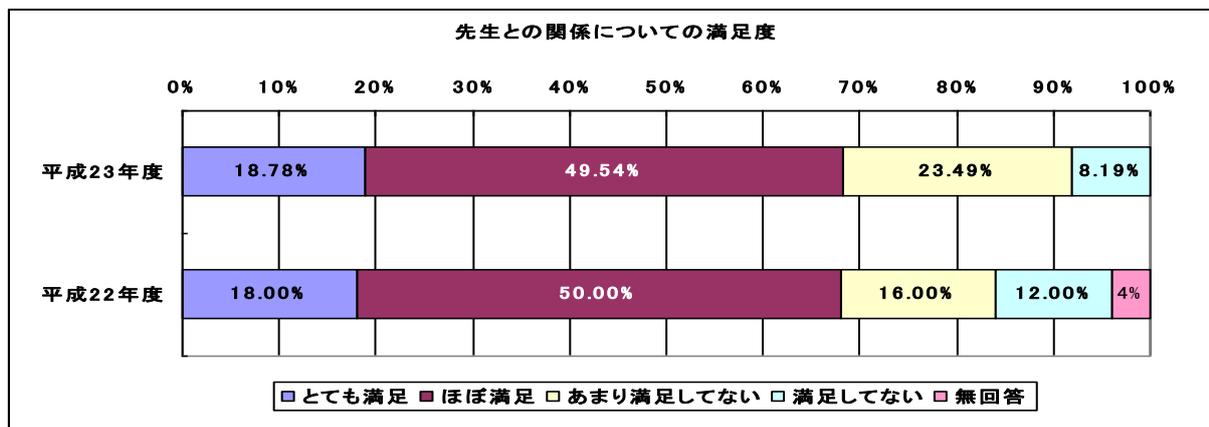


図 14 教師との関係についての調査結果

図 14 は不登校経験者の教師との関係についての調査結果である。

平成 23 年度は、22 年度に比べ教師との関係に「とても満足している」、「ほぼ満足している」の割合はほぼ変わらず、約 7 割の生徒が教師との関わりに満足している。「満足していない」、「あまり満足していない」と回答した約 3 割の生徒の気持ちの背景には、「図 13 授業内容の満足度についての調査結果」で述べた部分との関わりが大きいと思う。定時制高校には、学力の高い生徒からそうでない生徒まで幅広く存在し、基礎基本の指導を主体とする定時制高校の授業に不満を持つ生徒が少なくないことも見えてきている。その基礎基本を主体におく授業に対する比較的学力の高い生徒からの不満が、教師に対し「満足していない」という回答へ置換されたと考えても良いのではないだろうか。

(6) 魅力ある授業とは何か

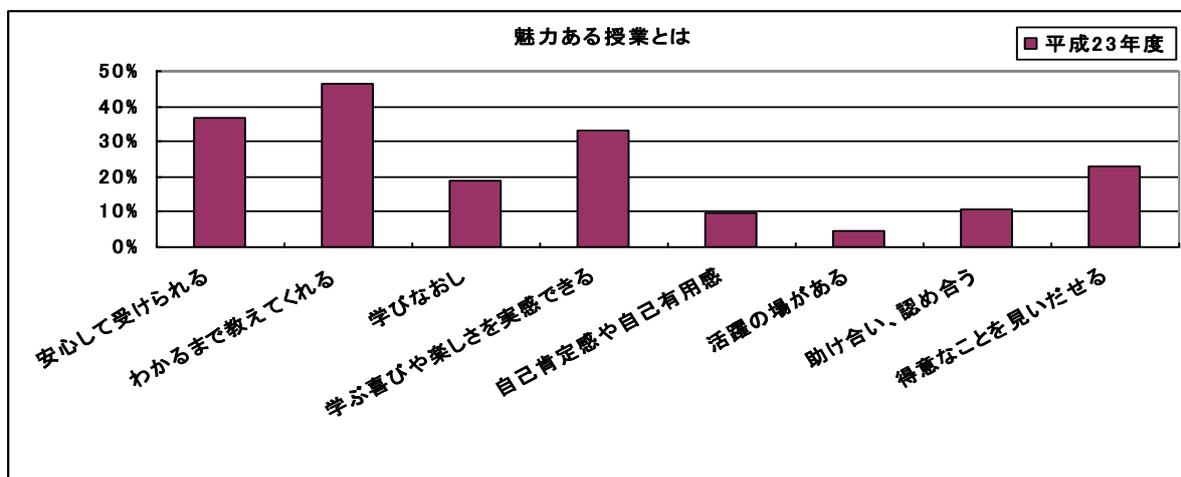


図 15 定時制高校の生徒にとっての「魅力ある授業について」の調査結果

図 15 は不登校経験のある定時制高校の生徒にとっての「魅力ある授業について」の調査結果である。

これは平成 23 年度のみの調査結果だが、グラフからは、「安心して授業を受けられる」、「わかるまで教えてくれる」、「学習の楽しさを実感できる」の割合が高かった。

「安心して受けられる授業」とは、言い換えれば「わからないところを『わからない』と言える授業」であること、「わかるまで教えてほしい」とは、「時間数が増えてもいいから、わかるまで教えてほしい」など、生徒の「勉強がわかるようになりたい」という強い思いが、このデータの結果となっているのではないだろうか。

Ⅲ 不登校(長期欠席)の原因についての考察[クロス集計]

小・中学校時代に不登校経験があると回答した生徒に対し、不登校になった原因や、その時の状況が高校で解決できているかどうかをクロス集計し、分析した。

「友だち関係」について

○ 《集計》 小学校・中学校時代に不登校経験者がある生徒に対し、「不登校になった原因」を一つ～三つまで選択させた。そして、不登校の原因として「友だちとの関係」を選んだ生徒群と、選ばなかった生徒群に分け、それぞれの群の生徒のうち何人が、「高校に通える理由」の中で「友だちと過ごすことが楽しい」を選んでいるかをクロス集計した。その集計データは、下表のとおりである。

※ 表中の「期待値」とは、左上のA欄の「186名(期待値110名)」を例にあげると、「不登校になった原因」と「高校に通える理由」の間に特別な関係がないとすれば、A : Bは、E : Fの比率 255 : 1008 (≒20 : 80) と同じになると「期待される」と考えた値である。その場合、A欄の期待値は $255 \div 1263 \times 545 \approx 110$ となる。そして、この期待値と実際の数値の差を見て、相互の関係を読み取っている。

	高校に通える理由で 「友だちと過ごすことが 楽しい」を選んだ生徒	高校に通える理由で 「友だちと過ごすことが 楽しい」を選ばなかった生徒	計
不登校の原因で 「友だち関係」 を選んだ生徒	A 186名 (期待値110名)	B 359名 (期待値435名)	545名
不登校の原因で 「友だち関係」を 選ばなかった生徒	C 69名 (期待値145名)	D 649名 (期待値573名)	718名
計	E 255名	F 1008名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(1)=115.59$, $p<.001$)

○ 《分析》 この集計結果から、小学校・中学校時代の不登校の原因として「友だち関係」を選んでいる生徒は、現在高校に通える理由として「友だちと過ごすことが楽しい」と回答している割合が有意に高かった。

○ 《考察》 小学校・中学校時代に「友だちとの関係」が原因で不登校経験があり、定時制高校に入学した生徒は、高校に通えている理由として、「友だちとの関係」が良好であるからと考えている生徒が多いということがアンケート結果から言える。また、小・中学校時代の不登校の原因に「友だち関係」を選んだ生徒が全体の43.2%もいることから、定時制高校においては、学級や部活動などにおける集団づくりのための指導・支援が重要な意味を持っていると考えられる。

「授業」について

- 《集計》 小学校・中学校時代に不登校経験がある生徒に対し、「不登校になった原因」を一つ～三つまで選択させた。そして、不登校の原因として「授業がわからなくなった、つまらなくなった」を選んだ生徒群と、選ばなかった生徒群に分け、それぞれの群の生徒のうち何人が、「高校に通える理由」の中で「授業がわかりやすく、勉強することが楽しい」を選んでいるかをクロス集計した。その集計データは、下表のとおりである。

	高校に通える理由で 「授業がわかりやすく、勉強することが楽しい」 を選んだ生徒	高校に通える理由で 「授業がわかりやすく、勉強することが楽しい」 を選ばなかった生徒	計
不登校の原因で「授業がわからなくなった、つまらなくなった」を選んだ生徒	A 74名 (期待値 47名)	B 359名 (期待値 386名)	433名
不登校の原因で「授業がわからなくなった、つまらなくなった」を選ばなかった生徒	C 63名 (期待値 90名)	D 767名 (期待値 740名)	830名
計	E 137名	F 1126名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(1)=26.55, p<.001$)

- 《分析》 この集計結果から、小学校・中学校時代の不登校の原因として「授業がわからなくなった、つまらなくなった」を選んでいる生徒は、現在高校に通える理由として「授業がわかりやすく、勉強することが楽しい」と回答している割合が有意に高かったと言える。
- 《考察》 小学校・中学校時代に「授業」が原因で不登校経験があり、定時制高校に入学した生徒は、高校に通えている理由として、「授業」が良好であるからと考えている生徒が多いということがアンケート結果から言える。また、小・中学校時代の不登校の原因に「授業がわからなくなった」を選んだ生徒が全体の 34.3%を占めており、小・中学校段階で授業でのつまづきを経験している生徒に対しては、わかりやすい授業などの指導・援助が重要な意味を持っていると考えられる。同時に、一人ひとりの学習状況に合わせて応用力をつけるための指導も必要であると考えられる。

「先生との関係」について

- 《集計》 小学校・中学校時代に不登校経験がある生徒に対し、「不登校になった原因」を一つ～三つまで選択させた。そして、不登校の原因として「先生との関係がうまくいかなかった」を選んだ生徒群と、選ばなかった生徒群に分け、それぞれの群の生徒のうち何人が、「高校に通える理由」の中で「先生が話を聞いてくれる、声をかけてくれる」を選んでいるかをクロス集計した。その集計データは、下表のとおりである。

	高校に通える理由で 「先生が話を聞いてくれる、声をかけてくれる」を選んだ生徒	高校に通える理由で 「先生が話を聞いてくれる、声をかけてくれる」を選ばなかった生徒	計
不登校の原因で「先生との関係がうまくいかなかった」を選んだ生徒	A 25名 (期待値 16.5名)	B 161名 (期待値 169.5名)	186名
不登校の原因で「先生との関係がうまくいかなかった」を選ばなかった生徒	C 87名 (期待値 95.5名)	D 990名 (期待値 981.5名)	1077名
計	E 112名	F 1151名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(1)=5.65, p<.05$)

- 《分析》 この集計結果から、小学校・中学校時代の不登校の原因として「先生との関係がうまくいかなかった」を選んでいる生徒は、現在高校に通える理由として「先生が話を聞いてくれる、声をかけてくれる」と回答している割合が有意に高かったと言える。
- 《考察》 小学校・中学校時代に「先生」が原因で不登校経験があり、定時制高校に入学した生徒は、高校に通えている理由として、「先生との関係」が良好であるからと考えている生徒が多いということがアンケート結果から言える。小・中学校時代の不登校の原因に「先生」を選んだ生徒は、14.7%と、あまり多くないが、小・中学校段階で、先生でつまずきを経験している生徒が在籍している定時制高校においては、先生との円滑な信頼関係が重要な意味を持っていると考えられる。

「身体の調子」について

- 《集計》 小学校・中学校時代に不登校経験がある生徒に対し、「不登校になった原因」を一つ～三つまで選択させた。そして、不登校の原因として「病気や身体の調子が悪くなった」を選んだ生徒群と、選ばなかった生徒群に分け、それぞれの群の生徒のうち何人が、「高校に通える理由」の中で「自分の生活リズムに合い、身体の調子がよくなった」を選んでいるかをクロス集計した。その集計データは、下表のとおりである。

	高校に通える理由で 「自分の生活リズムに合 い、身体の調子がよくなっ た」を選んだ生徒	高校に通える理由で 「自分の生活リズムに合 い、身体の調子がよくなっ た」を選ばなかった生徒	計
不登校の原因で「病気 や身体の調子が悪くな った」を選んだ生徒	A 95名 (期待値 57.7名)	B 183名 (期待値 220.3名)	278名
不登校の原因で「病気 や身体の調子が悪くな った」を選ばなかつ た生徒	C 167名 (期待値 204.3名)	D 818名 (期待値 780.7名)	985名
計	E 262名	F 1001名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(1)=39.10$, $p<.001$)

- 《分析》 この集計結果から、小学校・中学校時代の不登校の原因として「病気や身体の調子が悪くなった」を選んでいる生徒は、現在高校に通える理由として「自分の生活リズムに合い、身体の調子がよくなった」と回答している割合が有意に高かったと言える。
- 《考察》 小学校・中学校時代に「体調」が原因で不登校経験があり、定時制高校に入学した生徒は、高校に通えている理由として、「体調」が良好であるからと考えている生徒が多いということがアンケート結果から言える。そのことから、小・中学校段階で、体調によるつまづきを経験している生徒が一定数在籍している定時制高校においては、自分にあった日常の生活習慣を健全に保つよう指導することが重要と考えられる。

学習上のつまずきに対する姿勢について

- ≪集計①≫ 小・中学校時代に不登校の経験がある生徒の中で、「休むようになった理由」を聞く設問において、「授業がわからなくなった」という回答が含まれる生徒と含まれない生徒に分け、また、「休み始めた頃の気持ち」を聞く設問において、「勉強が遅れてしまうのではないかと心配」という回答が含まれている生徒と含まれていない生徒に分けて、この2群間でクロス集計を行った。

	休み始めた頃の気持ちで「勉強が遅れてしまうのではないかと心配」を選んだ生徒	休み始めた頃の気持ちで「勉強が遅れてしまうのではないかと心配」を選ばなかった生徒	計
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選んだ生徒	A 83名 (期待値 67.2名)	B 350名 (期待値 365.8名)	433名
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選ばなかった生徒	C 113名 (期待値 128.8名)	D 717名 (期待値 701.2名)	830名
計	E 196名	F 1067名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(1)=6.70, p<.01$)

- ≪分析①≫ この集計結果から、休むようになった理由として、「授業がわからなくなった」と回答した生徒は、休み始めた頃の気持ちで、「勉強が遅れてしまうのではないかと心配」と回答している割合が有意に高かった。

- ≪集計②≫ 小・中学校時代に不登校の経験がある生徒の中で、休むようになった理由を聞く設問において、「授業がわからなくなった」という回答が含まれる生徒と含まれない生徒に分け、また、休んでいる間、学校にしてほしかったことの設問に、「勉強を教えてほしかった」の回答が含まれている生徒と含まれていない生徒に分けて、この2群間でクロス集計を行った。

	休んでいる間、学校にしてほしかったことに、「勉強を教えてほしかった」を選んだ生徒	休んでいる間、学校にしてほしかったことに、「勉強を教えてほしかった」を選ばなかった生徒	計
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選んだ生徒	A 59名 (期待値 59.3名)	B 374名 (期待値 373.7名)	433名
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選ばなかった生徒	C 114名 (期待値 113.7名)	D 716名 (期待値 716.3名)	830名
計	E 173名	F 1090名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数に有意な偏りはなかった ($\chi^2(1)=0.00, p=.96$)

- ≪分析②≫ この集計結果から、休むようになった理由として、「授業がわからなくなった」と回答した

生徒と、休んでいる間、学校にしてほしかったことに対し、「勉強を教えてほしかった」と回答している生徒の数の間には特に有意差はなかった。

- 《集計③》小・中学校時代に不登校の経験がある生徒の中で、「休むようになった理由」を聞く設問において、「授業がわからなくなった」という回答が含まれる生徒と含まれない生徒に分け、また、休んでいる間の勉強についての設問において、「だれかに勉強を教えてもらった」という回答が含まれている生徒と含まれていない生徒に分けて、この2群間でクロス集計を行った。その集計データは、下表のとおりである。

	休んでいる間の勉強について「だれかに勉強を教えてもらった」を選んだ生徒	休んでいる間の勉強について「だれかに勉強を教えてもらった」を選ばなかった生徒	計
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選んだ生徒	A 320名 (期待値 311.3名)	B 113名 (期待値 121.7名)	433名
休むようになった理由に「授業がわからなくなった」を選ばなかった生徒	C 588名 (期待値 596.7名)	D 242名 (期待値 233.3名)	830名
計	E 908名	F 355名	1263名

* χ^2 検定を行ったところ、人数に有意な偏りはなかった ($\chi^2(1)=1.32, p=.25$)

- 《分析③》 この集計結果から、休むようになった理由として、「授業がわからなくなった」と回答した生徒とだれかに勉強を教えてもらったと回答している生徒の数の間には特に有意差はなかった。

- 《考察》以上の分析①、②、③を総合すると、休むようになった理由に「授業がわからなくなった」という回答を選んだ生徒は、気持ちとしては、勉強が遅れるのではないかと心配する割合は高いが、休んでいる間、学校に勉強を教えてほしいと期待したり、実際に、家族や塾など、教えてもらう機会を作ったりした生徒の割合は高くなかった。心配はするが、勉強に対しては積極的になれていない、という生徒の姿勢が窺える。

登校姿勢と友だち関係満足度の関係について

○ 《集計》の友だち関係についての問いに「とても充実・満足している」もしくは「ほぼ充実・満足している」のどちらかに回答した生徒を「満足」群とし、「充実・満足していない」あるいは「あまり充実・満足していない」と回答した生徒を「不満足」群とした。また、学校に行きたくないと思うことはあるか、という問いに「よくそう思い、休むこともある」あるいは「ときどきそう思い、ときどき休む」のいずれかに回答した生徒を「行きたくないと思ひ休む」群とし、また「よくそう思うが、本当に休むことはない」もしくは「ときどきそう思うが、本当に休むことはない」と回答した生徒を「行きたくないと思うが休まない」群、「そう思うことはない」と回答した生徒を「休もうとは思わない」群に分け、クロス集計表を作成した。

	友だち関係について「満足」を選んだ生徒	友だち関係について「不満足」を選んだ生徒	計
「学校を休もうとは思わない」を選んだ生徒	A 123名 (期待値 114.5名)	B 21名 (期待値 29.5名)	144名
「学校へ行きたくないと思うが休まない」を選んだ生徒	C 372名 (期待値 358.6名)	D 79名 (期待値 92.4名)	451名
「学校へ行きたくないと思ひ休む」を選んだ生徒	E 467名 (期待値 489.0名)	F 148名 (期待値 126.0名)	615名
計	G 962名	H 248名	1210名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=10.35, p<.01$)

- 《分析》「学校に行きたくないと思ひ休む」群の生徒は、友だち関係「不満足」群である割合が有意に高く、また「学校を休もうとは思わない」群の生徒は、友だち関係「満足」群である割合が有意に高かった。
- 《考察》学校を休もうとは思わない生徒は、友だち関係が充実し、満足している割合が高く、学級や部活動など、様々な場面における集団づくりのための指導・援助が重要な意味を持っていると考えられる。

登校姿勢と授業満足度の関係について

- 《集計》授業内容についての問いに「とても充実・満足している」もしくは「ほぼ充実・満足している」のどちらかに回答した生徒を「満足」群とし、「充実・満足していない」あるいは「あまり充実・満足していない」と回答した生徒を「不満足」群とした。また、「学校に行きたくないと思うことはあるか」、という問いに「よくそう思い、休むこともある」あるいは「ときどきそう思い、ときどき休む」のいずれかに回答した生徒を「行きたくないと思ひ休む」群とし、また「よくそう思うが、本当に休むことはない」もしくは「ときどきそう思うが、本当に休むことはない」と回答した生徒を「行きたくないと思うが休まない」群、「そう思うことはない」と回答した生徒を「休もうとは思わない」群に分け、クロス集計表を作成した。

	授業内容について「満足」を選んだ生徒	授業内容について「不満足」を選んだ生徒	計
「学校を休もうとは思わない」を選んだ生徒	A 108名 (期待値 90.8名)	B 36名 (期待値 53.2名)	144名
「学校へ行きたくないと思うが休まない」を選んだ生徒	C 312名 (期待値 284.4名)	D 139名 (期待値 166.6名)	451名
「学校へ行きたくないと思ひ休む」を選んだ生徒	E 343名 (期待値 387.8名)	F 272名 (期待値 227.2名)	615名
計	G 763名	H 447名	1210名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=30.08, p<.001$)

* Cについては調整済み残差が 3.4 であり、有意差があった。

- 《分析》「学校に行きたくないと思ひ休む」群の生徒は、授業内容「不満足」群である割合が有意に高く、また「学校に行きたくないと思うが休まない」群、もしくは「学校を休もうとは思わない」群の生徒は、授業内容「満足」群である割合が有意に高かった。
- 《考察》学校に行きたくないと思っている生徒を含め、学校を休まない生徒は、授業が充実し、満足している割合が高く、一層の授業内容の工夫や、学習についての個別支援などの充実が重要と考えられる。

登校姿勢と先生との関係満足度の関係について

- 《集計》先生との関係についての問いに「とても充実・満足している」もしくは「ほぼ充実・満足している」のどちらかに回答した生徒を「満足」群とし、「充実・満足していない」あるいは「あまり充実・満足していない」と回答した生徒を「不満足」群とした。また、学校に行きたくないと思うことはあるか、という問いに「よくそう思い、休むこともある」あるいは「ときどきそう思い、ときどき休む」のいずれかに回答した生徒を「行きたくないと思ひ、休む」群とし、また「よくそう思うが、本当に休むことはない」もしくは「ときどきそう思うが、本当に休むことはない」と回答した生徒を「行きたくないと思うが休まない」群、「そう思うことはない」と回答した生徒を「休もうとは思わない」群に分け、クロス集計表を作成した。

	先生との関係について「満足」を選んだ生徒	先生との関係について「不満足」を選んだ生徒	計
「学校を休もうとは思わない」を選んだ生徒	A 110名 (期待値 95.9名)	B 34名 (期待値 48.1名)	144名
「学校へ行きたくないと思うが休まない」を選んだ生徒	C 308名 (期待値 300.4名)	D 143名 (期待値 150.6名)	451名
「学校へ行きたくないと思ひ、休む」を選んだ生徒	E 388名 (期待値 409.7名)	F 227名 (期待値 205.3名)	615名
計	G 806名	H 404名	1210名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=10.19, p<.01$)

- 《分析》「学校に行きたくないと思ひ、休む」群の生徒は、先生との関係「不満足」群である割合が有意に高く、また「学校を休もうとは思わない」群の生徒は、先生との関係「満足」群である割合が有意に高かった。
- 《考察》学校を休もうとは思わない生徒は、先生との関係が充実し、満足している割合が高く、定時制では特に、先生との円滑な信頼関係が重要な意味を持っていると考えられる。

登校姿勢と行事や部活動との関係について

- 《集計》行事や部活動についての問いに「とても充実・満足している」もしくは「ほぼ充実・満足している」のどちらかに回答した生徒を「満足」群とし、「充実・満足していない」あるいは「あまり充実・満足していない」と回答した生徒を「不満足」群とした。また、「学校に行きたくないと思うことはあるか」という問いに「よくそう思い、休むこともある」あるいは「ときどきそう思い、ときどき休む」のいずれかに回答した生徒を「行きたくないと思ひ、休む」群とし、また「よくそう思うが、本当に休むことはない」もしくは「ときどきそう思うが、本当に休むことはない」と回答した生徒を「行きたくないと思うが休まない」群、「そう思うことはない」と回答した生徒を「休もうとは思わない」群に分け、クロス集計表を作成した。

	行事や部活動について「満足」を選んだ生徒	行事や部活動について「不満足」を選んだ生徒	計
「学校を休もうとは思わない」を選んだ生徒	A 93名 (期待値 73.8名)	B 51名 (期待値 70.2名)	144名
「学校へ行きたくないと思うが休まない」を選んだ生徒	C 234名 (期待値 231.1名)	D 217名 (期待値 218.9名)	451名
「学校へ行きたくないと思ひ、休む」を選んだ生徒	E 293名 (期待値 315.1名)	F 322名 (期待値 299.9名)	615名
計	G 620名	H 590名	1210名

* χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=13.52, p<.001$)

- 《分析》「学校へ行きたくないと思ひ、休む」群の生徒は、行事や部活動に「不満足」群である割合が有意に高く、また「学校を休もうとは思わない」群の生徒は、行事や部活動に「満足」群である割合が有意に高かった。
- 《考察》学校を休もうとは思わない生徒は、行事や部活動が充実し、満足している割合が高く、定時制では、制約も多いと思われるが、できるだけ行事や部活動の充実を図ることが重要であると考えられる。

IV まとめと今後の課題

今回の調査を通して見えてきた定時制に通う不登校経験のある生徒の考え方を的確に把握しながら定時制の授業内容や授業スタイルを多角的な視点で見据えることは、今後の定時制高校の教科指導の質向上に向け有効なことであり、さらにこれらの分析情報を生活指導や学校運営に役立てることも可能である。

これまでの調査結果を不登校経験のある生徒の考え方を中心に整理、再考してみると、今後の定時制の指導の在り方や方向性、また課題が浮かんでくる。

1. 不登校未経験者と不登校経験者を比較した調査結果のまとめ

(1) 食育の重要性の周知について

図 3-1～3-4 及び図 4-1～4-2 の結果において、不登校経験のある生徒は就寝時間と起床時間が遅く、朝食をしっかりと食べていないという実態が見えてきた。夜間定時制生徒は帰宅が遅くなり就寝時間が遅くなるということは、予測されていたが、今回の調査でもその予測通りの結果が示された。就寝時間が遅くなることで、自動的に起床時間も遅くなる。これが朝食を食べない理由の大きな理由のひとつと考えることができる。

朝食の欠食は子どもの身体的発達だけではなく精神的発達にも多大な影響を与えることは食育の観点からもすでに証明されていることである。定時制に通ってくる生徒達はいわゆるコンビニエンスストアで購入したスナック菓子をよく食べているが、「親が食事を用意してくれないから」、「経済上の事情で食事が食べられない」、「親が仕事に就ききりにならざるを得ず結果として作る時間がない」という理由を頻繁に聞く。

不登校経験のある生徒だけでなく、すべての生徒に対し食育の重要性を周知し、家庭を含め規則正しくバランスのとれた食生活を送らせることの重要性を繰り返し説く必要がある。

(2) 不登校経験生徒への理解について

図 5-1 及び 5-2 は、不登校未経験の生徒と不登校経験のある生徒の小・中学校時代からの親しい友だちについての回答結果であった。インターネットや携帯電話の存在が彼らに大きな影響を及ぼしていることは想像に難くない。これまで現実の世界の人間関係で苦しい思いをしてきた生徒達にとって、インターネットや携帯電話は至福の世界であり、現実世界に存在する親、友だち、教師は無用のものとなるだろう。不登校経験のある生徒の多くが「親しい友だちがいない」と回答した割合が多い理由が垣間見える。とりわけ親しい友だちを必要としないという解釈も可能であろう。これらのことから、不登校経験の生徒の多くは人間関係を築くことが不得意な生徒であることから、集団での活動やリズムに初めからなかなかなじめないことを教員サイドで理解しておくことが必要となる。

(3) 生活リズムの改善に向けたアドバイスについて

図 7-1 では「自分の生活リズムに合っている」から定時制高校を選択したと回答した不登校経験のある生徒が多かったわけだが、「自分の生活リズム」とは一体何かを把握する必要がある。「夕方まで仕事をしている」、「日中は自己目標達成に向け没頭すべき事柄がある」、「日中は身体的理由で体が思うように動かない」など、「自分の生活リズム」の概念はさまざまであろう。

定時制高校の教職員は、一人ひとりの生徒の「生活リズム」をしっかりと捉え、特に「日中は身体的理由で体が思うように動かない」生徒達の生活リズムの改善に向けた手厚いアドバイスを与えることが重要である。「総合的な学習の時間」や「ロングホームルーム」を利用しながら、近い将来社会人として

日中活動することが多くなるはずの生徒達に在学中のうちに健康的な生活リズムをしっかりと習得させたいところである。

(4) 粘り強い継続的な指導について

定時制高校では、生徒指導のいろいろな課題があり、そんな現状の中で上記を網羅した指導を実施するのは率直に言って容易なことではない。しかしながら、今すぐに取り組むべき大変重要な課題である。

いつ、どこでそれらの指導ができるのかを考えたい。「総合的な学習の時間」、「ロングホームルーム」の時間を活用せざるを得ないのが現状であろう。生徒達にそれらの理解を深めさせるためには単発指導であってはならない。単発指導の場合、当日欠席している生徒の心には響かない。本来そういった欠席のある生徒に語りかけたい事柄である以上、粘り強く継続的な指導を行いたい。

定時制の生活指導は非常に大変である。教科指導の合間を縫って、教員が生徒の指導に走り回る。「総合的な学習の時間」、「ロングホームルーム」で、これらの指導を行うならば、各学年の副担任（それに準ずる教員）主導でプランニング及び指導をすることが、話を聞く生徒にとっても新鮮な出来事であり、教員の負担軽減といった観点からも現実的な方策ではないだろうか。

2. 定時制課程における指導の在り方と方向性

生徒の通学満足度を高めるために

定時制に通っている不登校未経験者と不登校経験者を対象にした今回の調査の結果を参考に、定時制の指導の在り方や方向性、また課題について考えたい。

様々な家庭の事情や友人関係などが原因で心に傷を負い自信を失った生徒達や、小中学校時代に勉強を諦めてしまった生徒達に希望や期待を与えることのできる授業形態を構築するには、

- ・ カウンセリングマインドを備えた教員が
- ・ 生徒の「興味・関心」を敏感に捉え
- ・ 生徒の学習レベルに合った授業を適宜提供する

ことが必要となる。且つこれは教員個々の個人技であってはならず、組織としてのチーム活動として成立させ、個々の生徒の状況を把握するとともに幅広いニーズに対応できるような学習支援の在り方を検討する必要があると考える。

まずは、定時制の生徒指導と学習指導において、GOAL（目標の明確化）、REALITY（現状の把握）、RESOURCE（素質・資質の発見）、OPTIONS（選択肢の創造）、WILL（計画の策定・意志の確認）の5点について留意することが生徒の通学の満足度をさらに高めることに繋がるのではないだろうか。

(2) おわりに

今回の調査を通じて、様々な生徒の考え方を把握することができ、また、今後の定時制に必要とされている課題も多角的に捉えることができた。今後は、定点、経年の変化を分析していく必要もあることから、さらに調査・研究を継続していく必要があると考える。

最後になるが、この調査報告が、各教育現場で生徒一人ひとりが安心して登校し学習できる環境を構築するための一助となればと考える。

引用・参考文献

神奈川県立総合教育センター 2010「県立高等学校定時制課程に在籍する生徒に対する長期欠席等に関する調査報告書」

資料

<資料 1 > 定時制高校に通う高校生の学校・家庭生活に関するアンケート【調査 1】

<資料 2 > 「神奈川県における不登校対策の検証に関する研究」に係る県立高等学校定時制への調査（2）【調査 2】

再生紙を使用しています



神奈川県立総合教育センター

善行庁舎
〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1
TEL (0466) 81-0188
FAX (0466) 84-2040

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

亀井野庁舎（教育相談センター）
〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4
TEL (0466) 81-8521
FAX (0466) 83-4500

